

ヴェズレー再考 玄関間扉口の諸問題と3Dモデリング

ダーリング常田益代

フランスのロマネスク美術を代表するヴェズレー、ラ・マドレーヌ修道院（ヨンヌ県）は壮大な玄関間（ポーチ、ナルテックスの総称）をもち、この玄関間に面して三部からなる扉口彫刻を構成する。玄関間の規模と扉口に選択された彫刻図像は、この修道院教会堂のもつ二つの機能--すなわち世俗の参詣者を受け入れる巡礼教会堂としての機能とベネディクト会則を遵守する修道院としての機能--を反映すると考えられる。

ヴェズレーの玄関間扉口彫刻に関しては19世紀以来、今日にいたるまで多くの研究がなされてきた。定説となっているサレの説（1948年）に従えば、この扉口は1120年の大火の直後に将来の拡張計画を念頭に置いて構成され、工事は扉口（西）から東に向かって進行し、身廊の完成を見て、1135～1140年頃に玄関間の拡張工事がはじまった。しかし、玄関間の三つの扉口、特に中央扉口はサレ説では解けない多くの問題点を露呈している。それらを列挙すれば、中間層をもつ奇異な中央扉口の構成、種々の石材の混在、扉口には例外的な「聖霊降臨図」（？）の図像選択、多様な彫刻様式の併置、彫刻された石材の人為的な切断、接合部の不整合と空隙、計画変更の痕跡、などである。そもそも、西正面と玄関間に扉口構成を繰り返すこと自体例外である。ロマネスク彫刻が同時に建築構造部材である以上、またその彫刻が建築空間の性格を特化する役割をもつ以上、これらの問題点の究明には建築と彫刻とを同時に考察する複眼的なアプローチが必要であり、そのための研究方法が模索されねばならない。また、本来、これらの問題点の精査は図像研究や様式研究に先行されるべきものであろう。

本発表が試みる研究方法とその内容は次の通りである。

- 1) 観察：現存する玄関間の中央扉口、南扉口、北扉口の構成と周辺の石組、彫刻の損傷と切断と空隙、石質、柱頭の接合法、柱礎、モールディングの種類、外壁、扉口背面
- 2) 1) の観察結果を玄関間の三つの扉口立面図に記入するための3Dモデリング作成。モデリングに必要な数値はViollet-le-Ducによる修復時の図面と記録、および現地での実測値をもちいた。3Dモデリングによる立面図により三つの扉口を同時に視界に入れ、身廊に通じる壁体の正面と背面の関係を透視することが可能になる。
- 3) 玄関間の扉口彫刻と現在南外壁にそって放置されている扉口彫刻の様式分析
- 4) コナントによる未出版図面（本邦初公開）に見るヴェズレー建築施工過程
- 5) 階上間（トリビューン）と玄関間扉口との関係
- 6) ブルゴーニュ地方を主とした11世紀後半から12世紀前半における他の玄関間との比較

以上1) から6) の手続きと考察をもとに、現存する玄関間よりもう一つ前の復原試案を3Dモデリングにより提示する。